

# ヴィオラの魅力

期待の若手で、いろいろなアンサンブルに引く手あまたの鈴木勇人さん。でも、意外と恥ずかしがり屋さんで、終演後、ロビーに自ら出てくることはめったにありません。職人氣質のタイプなのでしょう。そんな職人氣質の一面を文章で表現していただきました。

## ヴィオラとは

弦楽器の中で一番知られていない楽器は間違いなくヴィオラです。その理由は様々ですが、大きな原因としてはヴァイオリン、チェロ、コントラバスのように遠くから見てもあきらかに違いがわかるわけではなく、ぱっと見は何らヴァイオリンと変わらないからではないでしょうか。オーケストラをあまり聴かない方からすると、第 3 ヴァイオリンと思う方もいるかもしれません。



では、ヴァイオリンとの違いは何なのでしょう、それはまず大きさです。遠くからみるとそこまで違いがわからないかもしれませんが、実際はヴィオラの方が一回り大きいのです。数字にすると、ヴァイオリンが 355 mm、ヴィオラは楽器によって違いますがだいたい 380~450 mm です。

それともう一つ、ヴァイオリンとヴィオラの重要な違いは音域です。ヴァイオリンは高い音から、ミ→ラ→レ→ソ、一方ヴィオラは、ラ→レ→ソ→ド、ヴィオラの方が低い音が出ます。これは室内楽やオーケストラで演奏する上でとても重要なことなのです。

## ヴァイオリンとヴィオラの演奏上の違い

演奏の中でのヴァイオリンとヴィオラの違いはなんなのでしょう？

よくヴィオラは楽だからと冗談を言われますが、半分正解で半分不正解だと考えています。なぜなら難しさに違いがあるからです。

まず、なぜヴィオラが楽だと思われるか、それはオーケストラにしても室内楽にしてもヴァイオリン（特に 1st ヴァイオリン）と比べると、譜面上の音符も少なく音域も低く楽だからです。これはソロ曲においても同じ傾向です。しかしそうなると、ヴィオラの難しさは何なのか、それは発音（音の出し方）なのではないかと私は考えています。ヴァイオリンより弦が太い分、右手（弓）が難しいのです。ひとつひとつの音にしっかり腕の重さを乗せ、弦に噛ませなくては出てくる音がモゴモゴして輪郭が見えなくなってしまいます。ヴィオラにおいては大きくかつ、はっきりとした発音で弾くことは非常に難しいのです。こういったことをふまえると実は楽器を弾くということに関しては、ヴァイオリンよりヴィオラの方が難しいのです。

## ヴィオラの魅力とは

私自身、ヴィオラを 3 台所持しています。上掲の写真では右から古い順になっています。

さてここで見ていただいで分かるように、大きさや形がまちまちです。最初の項目で述べたように、ヴィオラは楽器によっては大きさに 70 mm も差があるのです。ここがヴィオラの面白さであります。ぜひオーケストラなどを聴くときに客席から見て違いを楽しんでいただきたいと思います。もちろんそれだけ大きさに差があればそれぞれ違う特徴を持っていますし、奏者によっては楽器との相性なども変わってきます。

またそれだけではなく、ヴァイオリンでは一般的に古い楽器が良いと言われていますが、ヴィオラは新しくても良い音の楽器が存在します。個人的な考えではありますが、その理由は先ほど述べた発音と本来楽器が持つ特徴のためではないかと考えます。

ヴァイオリンは元々の音が高いため、新しい楽器は少し音がキンキンしてしまいます。一方ヴィオラは、音が低くあまりキンキンせず、難しい発音もはっきり音の粒が聞こえやすいのです。あくまで私の感覚ですが、私の所有する3台も違います。新しい楽器は上記で述べたように音ははっきりしていて、2番目に古い楽器は音がだいぶ丸くなっています。一番古い楽器は、不思議なのですが弾いていると音が分離する感じがするのです。おそらく響きと関係しているのではと思います。

### ヴィオラの一番の特徴

いろいろなことを書いてきましたが、ヴィオラが一番の特徴は音の個性だと私は思います。その理由は、楽器の大きさが様々であり箱の大きさが違うこと、また、ヴィオラはヴァイオリンほどヴィルトーゾ（技巧的）な曲が少ないため、長い音をどのように弾くかなど、より音と向き合う時間が多いため、上手な人ほど自分の音を持っている、それがヴィオラの魅力なのです。

そのようなことに注目しながら、ぜひヴィオラ単体の音を聴く機会を作ってください。今はヴィオラの音が他の楽器と区別がつかなかったとしても、様々なヴィオラの音に触れる機会が増えてくることで、自ずとヴィオラの素晴らしさに心が奪われていきます。

ヴィオラの魅力を色々な角度から説いていただきました。今後のコンサートで、ヴィオラ、その音色を幅広く奥深く味わえるのではないのでしょうか。

**プロフィール:** 4歳からヴァイオリンを始める。洗足学園音楽大学を首席で卒業。その後ヴィオラに転向。同大学院修士課程を修了。洗足学園音楽大学在学中、特別選抜演奏者に認定、前田記念奨学金を授与。室内楽でプロジェクトQ・第8章、第9章に出演。第7回横浜国際音楽コンクール弦楽器部門第1位。日演連演奏会にて札幌交響楽団とコンチェルトを協演。これまでにヴァイオリンを飯田奈々子、西田博、三浦章宏の各氏に師事。ヴィオラを岡田伸夫氏に師事。現在札幌交響楽団ヴィオラ奏者。

(担当 大岡 康利)

### こうしてピアニストになりました

徳田 貴子

ピアニストになったきっかけは、アメリカ留学です。

高校時代、もっと音楽を学びたいという思いと、豊かなリベラルアーツ教育に興味を持ち、アメリカの音楽大学に進学しました。けれども当初は不安でいっぱいでした。日本でそれまで目立った活躍をしておらず、家族に音楽関係者もない私には、留学でどうすれば成功するのかかわからず、将来像も描けなかったからです。



それでも現地で素敵な友人たちに恵まれました。留学生でありながら祖国に仕送りをする人。一族の期待を一身に背負った人。そこには音楽によるアメリカンドリームを目指す学生がたくさんいました。彼らと比べ自分はなんと恵まれた環境にいたのでしょうか。それ以降、失敗したら太平洋に身を投げる覚悟で練習や勉強に励みました。

進学した大学院では、二人の恩師と出会いました。まずジュディス・バーゲンガー先生です。楽譜の深い読み方から弾き方まで、1音単位で熱心に教えてくれました。また、「自分の存在を申し訳なく思わず、堂々と表現なさい」と何度も励まされました。ケヴィン・ケナー先生には、より創造的な表現を学びつつ、一人の人間としても大いに影響を受けました。ある時、先生にこれまでの指導のお礼をしたところ、「頑張ったのは君であり僕ではないよ」と言われました。世界で活躍しながら謙虚に日々努力する先生の姿に、音楽性だけでなく人間性でも近づきたいと思いました。

アメリカでは、幼児であろうと、創造的な事柄に挑戦することを肯定する文化があります。そのような環境にいて、自分らしい活動とは何かと考えるようになりました。博士論文では冷戦期ポーランドの統制下で活動したバツェヴィチの作品に取り組み、その想いに共感しました。制約を超えて表現された作品に向き合うことは、私自身が殻を破って生きることに繋がりました。

帰国後は、年1回のリサイタルを5年間続けることを目標にしました。その過程で、道銀文化奨励賞を受賞し札幌交響楽団と協演する機会をいただいたことは大変励みになりました。今年は、今の私の原点であるバツェヴィチの作品を中心に演奏いたします。作曲家の想いに寄り添った表現を皆様と共有できたらと思います。

**プロフィール:** 恵庭市出身。北広島高校卒業後渡米、マイアミ大学フロスト音楽学校博士課程修了。札幌市民芸術祭大賞、道銀芸術文化奨励賞受賞。

**編集後記:** ヴィオラの魅力を遺憾なく書いてくれた鈴木さん。ご自分の写真ではなく、ヴィオラで勝負します。徳田さんは、札幌中心にコンサート等を行っています。2月号の古川佳奈さん、リスト音楽院に合格、9月入学!(や)

○意見感想を: 札幌コンサートホール高谷宛 E-mail volunteer@kitara-sapporo.or.jp  
2024年3月14日発行 発行者: 堀川 正和 編集責任者: 大岡 康利

ハンノキの花殻  
カット: 小川悠紀弥

